

1. CT検査のCOVID-19対策

井田 義宏 藤田医科大学病院放射線部

新型コロナウイルス感染症 (以下、COVID-19) へのCT検査の対応については、日本放射線科専門医会・医会から慎重な運用が求められている¹⁾が、現状ではほかの検査体制が整っていない中でCOVID-19の疑似症例や除外検査にもCTが多用されており、日本環境感染学会では補完的な画像診断としてCT検査の重要性を示している²⁾。また、日本脳卒中学会からは、急性期脳梗塞患者の診断には感染管理上MRIは原則行わず、必要に応じて単純CTやCTAでの対応としている³⁾。これらの状況から、COVID-19に対する画像診断としてCT検査は重要なものであり、感染防御体制をしっかりと確立しておかなければならない。

まずは、基本的な標準予防策⁴⁾を徹底し、その上でCOVID-19対策を考えていく。また、一般的にCT検査は予定が詰まっていることが多く、検査効率と感染対策の狭間での対応を迫られることが多いため、感染防止や感染拡大防止策の質を担保しつつ、過剰な感染対策とならないように正確な情報収集と運用が求められる。

検査のポイント

COVID-19に対するCT検査では、2mm以下のスライス厚で全肺を撮影し、淡い肺炎画像 (すりガラス状陰影など) が描出できるようにする²⁾。左右対比や後方への分布の観察のため、冠状断 (コロナル) や矢状断 (サジタル) の再構築も有用である。

当院の放射線科医は標準的に診断結

果を伝えるため、the Society of Thoracic Radiology, the American College of Radiology, 北米放射線学会 (RSNA) の3団体が提唱する以下のような分類⁵⁾で統一してレポートを記載している。

- ① COVID-19を強く疑う (Typical appearance)
 - ② COVID-19を疑う (Indeterminate appearance)
 - ③ COVID-19の可能性あり (Atypical appearance)
 - ④ 肺炎なしもしくはCOVID-19はnegative (Negative for pneumonia)
- また、時間外でも放射線専門医が院外から画像を確認できるアプリケーションを導入し⁶⁾、担当医から随時相談を受けられる体制を確立している。

検査環境のゾーニング (図1)

次に、状況に応じた感染対策と実例を紹介する。

当院では、以下のようなゾーニングを行っている。

- レッドゾーン：検査室内
汚染区域 [個人防護具 (personal protective equipment : PPE) を着用]
- イエローゾーン：検査室内で操作室との出入り口側
レッドゾーンからグリーンゾーンへの汚染をさせないための措置を行う (PPE脱衣、感染性廃棄物の処理など)。
- グリーンゾーン：操作室
感染の危険性がない区域 (感染リスクのあるものを持ち込まない)

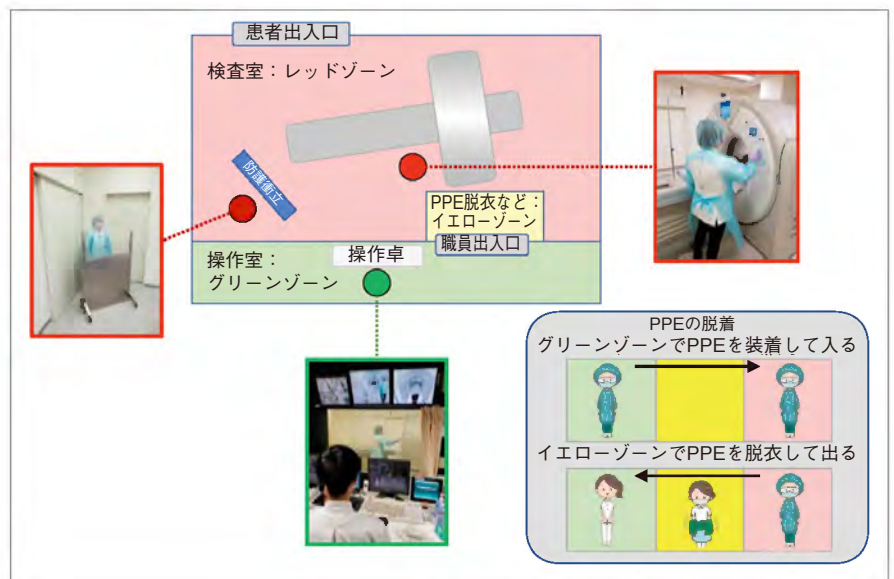


図1 検査環境のゾーニング